

Title	青苗法施行の由來について
Author(s)	草野, 靖
Citation	東洋史研究 (1961), 20(1): 1-22
Issue Date	1961-06-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/148208
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

東洋史研究

第二十卷 第一號 昭和三十六年六月 發行

青苗法施行の由來について

草 野 靖

目 次

緒 論

一 北宋の財政と和糴

二 北宋の和糴對策——爭糴の禁と配糴

三 青苗法

結 論

緒 論

王安石の青苗法（常平新法）が、利貸資本の苛酷な搾取に苦しめられている農民に低い利息で資金を融通し、そしてこれら農民達を利貸の束縛から解放しようとする政策であったことは、既に指摘されておる處であり且つまた疑いのない處でもあるが、一體何が契機となつてこうした政府自身の手による資本貸付が始められたのだろうか。當初より多くの人から弊害を豫見され又非難を受けながら尚その反對を押し切つてまで敢えて實施に移さねばならなかつた程、それ程に王安石

石其他新法官僚をせきたてていた事情は何であつたろうか。一體どんな効果がこの法に期待されていたのだろうか。本稿はまず此處に論點をしぼっている。⁽¹⁾

最初に研究の手掛りを探る意味で熙寧三年（一〇七〇）より實施された河北路の青苗法の則例を概観しておく、青苗錢は表記の基準（最高額）に従い、夏の作物には正月三十日以前に（夏料）、秋の作物に對しては五月三十日以前に（秋料）、⁽²⁾見錢で支拂され、その返済は收穫後（＝納稅期）に時價に換算して支拂錢額相當量の穀物でもって行うことになっている。そこでこれを見て先ず注意されるのは農村の編戸が對象とされていることである。

戸等	支拂額
第五等戸 客戸	一、五貫
第四等戸	三、〇貫
第三等戸	六、〇貫
第二等戸	一〇、〇貫
第一等戸	一五、〇貫

これは何でもない事のようにであるが、舊常平法が、例えば東坡奏議^九再乞發運司應副浙西米狀（元祐六年・一〇九一・三月二十三日奏）に、

去年所糴常平米。雖粗有備見今州縣出賣米價不甚翔踊。但鄉村遠處飢羸之民不能赴城市收糴。官吏欲差缸載米下鄉散糴。卽所須數目浩瀚。恐不能足用。

とあり、曾鞏また同様の意見を述べ、更に南宋時代に入つて、「官司賑濟止及近郭游手之人」とか「賑濟只及城郭之内。而遠村不霑實惠」とか云うことが繰り返し述べられている⁽³⁾。處から明らかなように、城郭民を主な對象にしていたのに比較すれば顯著な相違がある。第二には、この法が兼并の利貸を抑え困乏を救うと云うことで前貸を行っていることである。これもまた、宋朝の利貸に對する從來の態度が宋史^{卷三陳舜俞傳に}

祖宗著令。以才物相出舉。任從書契。官不爲理。

とあり、また宋會要輯稿・食貨四・青苗・熙寧三年二月一日條の韓琦の奏に、

大凡兼并所放息錢。雖取利稍重緣有通缺。官中不許受理。

とあるように當事者同志の處置に任かせ、唯複利貸付や田宅牛馬に依る準折償還を禁ずるに止まっていたのに比べれば大

きな進歩である。第三は、この貸付が客戸・五等戸の下層民より第一等戸まで、即ち農村の全戸等を對象にして且つ戸等が高くなる程支俵額を大きくし、更には、

如所支錢外。更有贍數。其第三等以上人戸。委本縣度量物力。於今來所定錢數外。更添數支給。若更有贍錢。如坊郭人戸實有自己物業可充抵當願借請官錢者。(中略)依鄉村青苗錢例支借。不得過抵當物業所直價錢之半。

とあるように、青苗錢に餘りがあれば、三等以上の戸に特に規定額以上に支俵する。それでも餘りがあれば坊郭の不動産所有者に支俵すると云うように規定されていて、この規定から見れば恰も上位三等戸に重點が置かれていたのではないかとさえ疑われることである。これは青苗法施行の當初直ちに問題とされた處で、判大名府韓琦が、

鄉村上三等并坊郭有物業人戸。乃從來兼并之家也。今皆多得借錢。每借一貫令納一貫三百文。則是官放息錢也。興元敕抑兼併濟困乏之意絕相違戾。

と批判し、これに對して三司制置條例司が、

今按。鄉村上三等及城郭有物業戸内。亦有闕乏之人。就人取債。豈皆是兼并之家。

と反論しているが、この論争には尙釋然としないものが残されているようである。第四は舊常平法が景德三年(一〇〇六)正月諸路に常平倉を設置した時の措置に「惟沿邊州郡則不置」とされ(宋會要食 貨五三)、また元祐元年(一〇八六)八月丁亥に係る司馬光の奏論中に(長編卷 三八四)、

其河北州縣有糴便司斛斗見多。沿邊州縣轉運司見糴軍糧處。更不糴常平倉斛斗。

とあるように、沿邊に常平倉を置くのを避けようとする態度をとっているのに對して(勿論これは軍糧平糴＝穀物の出廻り期穀價低賤の時に軍糧を調達するのを妨げぬためであらう)、常平新法が河北・京東・淮南の軍糧買付地に先ず實施され(宋會要食 貨五三)、且つまた王安石自身が、

常平新法。本所以權邊糴待緩急也。

と述べている處からうがcaえるように、軍糧の買付けに對して一段と積極的な姿勢を取っていることである。青苗法が軍糧買付けに密接な關係を持っていたことを知ることが出来る。そこで、以上に指摘した三點を考慮しながら宋朝の和糴運営より考察を始めることとする。

一 北宋の財政と和糴

北宋の國家財政の運営に特徴的なことの一つは、その財政需要物資の大部分を民間からの買い上げに依つて充足し、人民から現物の形で直接に取り立てる租稅收入には差程の重點を置いていなかったことであろう。北宋も末期宣和年間の事態を傳えるものと思われる周行己の浮沚集卷一上皇帝書の一節には、

而物出于民。錢出于民。天下租稅常十之四。而糴常十之六。與夫供奉之物器用之具。凡所欲得者。必以錢貿易而後可。使其出于民者常重。出于官者常輕。則國用其能不屈乎。

とあり、民間より買い上げる物資が財政需要の六割を充たしており、従つてこの買い上げを適切に行うことが財政の要諦であると論じている。

こうした民間からの買い上げ物資の中で最も大きな比重を占めていたのは、矢張り、軍隊を養うのに必要な食糧・衣料であつたろう。續資治通鑑長編卷一景祐元年（一〇三四）五月丙寅條の三司陳琳の奏論に依れば、

昔養萬兵者今三萬矣。河北歲費芻糧千二十萬。其賦入支十之三。陝西歲費千五百萬。其賦入支十之五。自餘悉仰給京師。とあり、河北陝西兩路の軍糧の中、現地の租稅で賄われるのはそれ／＼三割・五割程度で他は皆糴買に依つていたと述べている。また京師開封府へ年々運び込まれる東南の漕運米六百萬石は、租稅收入の外に、大量に和糴を行つて調達され、

その額は明道二年（一〇三三）七月甲申の江淮安撫使范仲淹の報告では（長編一）、

江淮諸路。歲以饋糧。於租稅之外復又入糴。兩浙一路七十萬石。以東南數路計之。不下三二百萬石。故雖豐年穀價亦

高。云々。

とあり、毎年三二百萬石を下らなかつたと傳えている。

そこで、この大量の穀物買付けが適切に行えるかどうかと云うことは北宋財政の基本的な問題であり、爲政者にとって頗る重大な關心事となつていた筈であるが、しかしこの穀物買付けは終始商人の妨害行爲^{||}買い占めと物價吊上げに悩まされながら、これを排除しようと努力を重ねつつ行われなければならなかつたようである。例えば宋會要輯稿・食貨三九・市糴糧草・天聖三年（一〇二五）十月五日條に、

權三司使公事范雍言。和糴和買糧草有未便事。謹條言之。一。天下和糴和買夏秋糧草。雖逐處開場。多被經販行人。小估價例。外面添錢收買。候過時。乘官中急市。卽添價。却將糴買者中買。兼多方拌和均減。致糧草怯弱。又枉費官錢不少。

とあり和糴の弊害を論じている。本文の意味は常平倉の糴糶を論じた元祐元年（一〇八六）八月丁亥に繋る司馬光の劄子を參照すれば一會明瞭であるが、政府が和糴を行うと、初め經販行人がことさらに低く市價を見積り政府がそれに據つて官價を定めるので、なかなか買付けが進まない。その間、行人は外で官價を少し水増しして買い占め、愈々買付時期が過ぎて政府側があわて出した頃、兼ねて買い占めていた穀物を高い値段で賣り込んで来る。またその際には粗惡品を混ぜ合せるなど悪いことをしている。こうした弊害が全國共通にみられる、と云うにある。右に續いて范雍は、

乞。自今和糴和買。須及時早開場。委知州軍同通判。與監官當面。勅行人。依在市見賣價例估定錢數。仍復迹時糴買。不得容信作弊。直至過時。大估價錢。得怯弱糧草。枉費官錢。更委轉運司專切提舉。違者勘罪以聞。^(中)從之。

と述べ、今後は早めに買付の準備を濟ませ、買付價格は知州・同判・通判及び和糶場の監官とが一緒に會合し、行人に市場の實際價格を報告させて、それに據つて嚴正に決定し、穀物が出廻つた時遅れずに買付けを始め、行人の報告をうのみ、に信用したり若しくは行人と共謀して實狀に合わない官價を立て先述したような弊害を招くことのないようにするよう提

唱して裁擇を得ているが、此處に和糴の問題點が出ているようである。

第一は、政府の買付が往々時期に遅れ勝ちであったこと、第二に政府の買付價格決定に當って行人の謀略が行われ、官價が低く決められる結果、買付の不振と商人の買占めを招いていたこと、第三に、商人の買占め價格吊上げに依って政府の財物の枉費が甚しかったこと、又買占商人は政府が定價を定める時ことさらに低い偽りの市價を報告している商人と同一人乃至これと結托した商人であること、の三點、要するに政府の需要を見越した商人の買占めがガンになっていたことが知られる。

二 北宋の和糴對策

そこで、こうした商人の活動に對して政府がどんな手を打ったかと云う點を検討してみよう。先づ三司使范雍が云うような、市價の實際に従って時期を失せず買付けると云う原則の實行であるが、これは政府の方に限られた財源で必要な一定量の穀物を買わねばならないと云う制約があり、また糴買現地の州郡から屢々資金の不足を訴えている事實のある處からみて、なかなか守られなかったのではないかと思われる。例を挙げると、宋會要輯稿・三九・食貨・市糴糧草・大中祥符五年（一〇一二）五月條に、

出内藏庫錢百萬貫。付三司斂糴軍糧以實邊郡。（略）諸州積鏹數少。故出禁錢以佐用度。

とあり、諸州糴買費の不足を補うため特に内藏庫の錢を支出したことを記している。豊稔の際内藏庫より特別に糴買費を支出することは屢々行われているが、この支出が時期遅れになったりまたこの援助の得られなかった州郡で、買付けに圓滑さを缺くことも間々あったと思われる。降って同・天禧四年（一〇二〇）十二月條では、

詔。如聞河北州軍假民錢市糧斛。慮成搔擾。止之。如已假得錢。卽時給還。云々。

とあって、民（恐らく都市在住の商人であろう）の錢を借りて軍糧を買ったことを傳え、また降って同・天聖六年（一〇

二八) 十月條には、

河北轉運司楊嶠・王沿言。(中略)窃覩。近歲近襄州軍秋田比常年豐熟。本司雖已依常平例下逐州軍置場收糴。緣闕見錢。近蒙自京支撥見錢三十萬。與本司糴買糧草。約只得五十萬石。已來深慮。過時爲豪民兼并之家趁賤收糴定中無可計置。云々。

とあり、糴買費の不足から豪民の買い占めを許している事態を伝え、また食貨一四和糴には、

仁宗朝。以左藏三十萬應河北和糴之用。時韓琦論。和糴價不高於市糴。何人肯糴與官。

とあり、財源不足から官價は市價に比べて割安とならざるを得ず、その爲め穀物の調達が旨くゆかなかったことを傳えている。更に范文正公集・范文正公年譜補遺には、

明道二年(一〇三三)九月。體量淮南軍除糴人民二麥。并除買亭民鹽貨。未有見錢支給。并向春逐處缺乏軍儲。亦無錢和糴。云々。

とあり、財源不足が遂に民間物資の除買かひがを生じていることを伝え、續資治通鑑長編卷一六〇慶曆七年(一〇四七)四月庚戌條にも、

(京東轉運使包)拯言。臣前年夏中。因伴送北使回。見河北麥熟價賤。乞支借見錢及時收糴(中略)緣河北錢幣有限。竟不能廣有積聚以備將來。臣去秋赴任京東日。竊見。朝廷差仲簡・宋選・陳榮古往三路便糴。臣亦曾上言。以逐處少得見錢。恐難集事。云々。

とあり、同様に財源の不足を傳えている。この様に限りのある(或は不足勝ちな)財源で商人の買占めに對抗しながら和糴を行うとすれば、勢い別途に強硬手段を執らねばならなくなるのは當然であろう。そしてこの強硬手段に執られたものが商人に對する爭糴の禁止と農民に對する配糴・括糴であったと考えられる。

(4) 爭糴の禁

先ず商人に對する爭糶の禁止からみてゆくと、これは會要・食貨・市糶糧草・大中祥符六年（一〇一三）五月條に、大理寺丞劉有政言。今後和糶州軍。許令小民收糶口食外。並依三司起請。卽不得有妨官中收糶。其價。夏以五月。秋以九月。悉用中旬價量增之。以爲定額。詔付三司定奪以聞。

とあり、また李觀の直講李先生文集^{卷二}寄上孫安撫書（皇祐四年・一〇五二・一月作）の一節に、於境內又有禁焉。止民糶以待官糶是也。且買人在市。農人在野。糶之則米聚州縣。不糶則穀留鄉村。^{（中略）}若曰官糶數足然後放民糶。俟河之清耳。云々。

とあり、また續資治通鑑長編^{卷一}景祐元年（一〇三四）七月壬子條の常平倉を論じた杜衍の奏議に、

今豪姓蓄買乘時賤收^{（中略）}須其翔踴以牟厚利。而農民貴糶。^{（中略）}謂宜^{（中略）}公糶未充則禁爭糶以規利者。云々。

とあり、また同書^{卷四}元符元年（一〇九八）六月壬辰條の涇原路經略安撫使章燾の奏に、

應沿邊諸州軍縣鎮城塞堡子糶買去處。預揭勝諭人戶。不得與官中爭糶增長物價。如將來官中收糶不行。歲計闕乏。卽委所屬定根括停場之家積蓄斛斗。云々。

とある處から明らかに窺えるように、政府が和糶を行う處で一定期間民間の穀物取引を禁止し、これに據つて政府は穀價の値上りを抑えて適當な價格で豫定量の穀物の買付けを果そうとするものである。この禁令の對象になったものが大きな資本を持つ都市の商人であることは言うまでもない。

(四) 配 糶

農民への配糶は穀物の強制的買付けは、以下に示す諸例から分るように廣く各地で行われている。先ず宋會要・食貨三・九・市糶糧草・大中祥符五年（一〇一二）十月條で、

詔西京。市糶軍糧。轉運使止當勸誘無得迫促。時轉運使於西京市糶。條約過當。民不如約則杖之。故特禁止。とあり、續資治通鑑長編^{卷八}大中祥符六年（一〇一三）十月丁亥詔に、

如聞諸路和糴不均。民戶頗有煩擾。可令河北・陝西・京東西轉運司各蠲其半。中等戶已下免之。

とあり、また同書^{卷一}一〇天聖九年（一〇三二）九月己巳條に、

詔。出內藏庫絹六十萬。下河北折糴軍儲。自三等而上戶。計其稅。一石者糴五斗。

とあり、晁補之の雞肋集^{卷六}八殿中侍御史趙君墓誌銘（韓祐・天聖五年進士慶曆五年卒）に、

河北配糴民粟至二百萬石。民蓄穀盡籍加督責。戶不聊生。云々

とあり、胡宿の文恭集^{卷三}六三宋故宣徽北院使^{略中}鄭公墓誌銘（諱戢 皇祐五年卒）に⁽⁴⁾

（知永興軍兼管勾陝西轉運使計度糧草公事鄭戢）又奏罷括糴之法。誘邊人蓄粟以平穀價。

とあり、包拯の孝肅包公奏議^{卷七}寬恤・請差災傷路分安撫に、

（江淮・兩浙・荆湖南北路）兼又官中配糴民間之蓄。盡輸入官。官糴既多。云々。

とあるなど數多く散見している。

しかしこれ等の對策は共に當を得たものとは云えず又充分な成果を擧げることも出来なかつたようである。農民に對する配糴はそれ自體いろいろな弊害を伴ひ易く農民の生活を脅すことになり、政府としても成るべくこれを避ける態度をとっており、殊に配糴が安い値段で強行されると、例えば溫國文正司馬公文集^{卷三}一蓄積劄子に、

所給官錢既少。百姓不肯自來中糴。則遣人編欄搜括。無以異於寇盜之鈔劫。是使有穀之家愈更閉匿不散入市。穀價益高人不聊生。

とあるように、却つて穀物が市場から姿を消し物價の騰貴を招いて消費者の生活を動搖させる結果を生じているようであるし、爭糴の禁止も、先掲直講李先生文集・寄上孫安撫書の續きに

若曰官糴數足然後放民糴。俟河之清耳。官糴價一定。民糴價漸高。

と云つて、官糴の完了するのを待つのは河清を俟つに等しいと稱している一節があり、甚だ効果の薄いものであったこと

を物語っている。宋會要・食貨三九・市糴粮草・景德三年（一〇〇六）九月條に依ると、

西京轉運使鄭文寶等言。請。於部內州軍。等第分配坊郭之民糴買芻粟。以充儲蓄。

とあり、坊郭民に戸等に應じて軍粮の買付けを割當てようと云う建策がなされているが（帝以其擾民不許）、この考えも政府側の財源の制約と商人の買占めの盛行と云う障礙に直面して、何とかこれを切り抜け軍糧を確保しようとした腐心の現われと解することが出来る。

ところで争糴の禁止はどうして効果を持ち得なかったのだろうか。李觀の見解では「官糴價一定。民糴價漸高」と云っていて、相變らず政府の需要を見越した商人が、官價よりも有利な買付價格を示して農民を誘惑するのを原因に擧げているように感じられるが、しかしもっと根本的な原因は當時の經濟界に利貸が盛行していたことに在ったと思われる。一體に農民が收穫直後一齊に穀物を賣り出し、この結果穀價の甚しい低落を招くのは、直講李先生文集卷六富國策第六（寶元二年・一〇三九作）の見解に依れば、

夫農勞於作劇於病也。愛其穀甚於生也。不得已而糴者。則有由焉。小則具服器。大則營昏喪。公有賦役之令。私有稱貸之責。故一穀始熟。腰鎌未解而日輸於市焉。糴者既多。其價不得不賤。賤則賣人乘勢而罔之。輕其幣而大其量。不然則不售矣。

とあり、農民達が收穫期に服器・冠婚喪祭其他のことではかねがね借りていた負債の返還を迫られるのを原因に擧げているが、これには南宋の人衛涇（淳熙十一年進士）も同意見で、後樂集卷四上沈運使作賸書の中で、

平糴本良法。但先後失時反爲弊法。要是八九月之交農人有米質債方急。富室邀以低價之時。有司出此則可以持平。公私俱利。十月以後場圃一空。小民所有悉折而歸大家。

と述べている。陸九淵の陸象山全集卷八與陳教授書の一節に、

今農民皆貧。當收穫時多不復能藏。亟復糴易。以給他用。以解通責。

とあるのも同意見である。こうした農民に對する貸付は、勿論いろんな職業階層の人々で、財力のある者が行っていたろうが、矢張り都市在住の商人の行うものが多かったのではないかと思われる。先掲直講李先生文集には、續いて穀物を賣り拂った後の農民に觸れ、

農人倉廩既不盈。寶窖既不實。多或數月。少或旬時。而用度竭矣。土將生而或無種也。耒將執而或無食也。於是乎。日取於市焉。糴者既多。其價不得不貴。貴則買人乘勢而閉之。重其幣而小其量。不然則不予矣。

と述べ、僅かの蓄えを使い果して困窮した農民達がまた市に於いて商人から高價な種子・食糧を購入しなければならなかったことを論じているが、このような場合現金を持たぬ農民達は當然にまた次の收穫を當てて貸付を受けたことであろうし、更に商人には商人獨自の貸付即ち物品の賒賣がある。

當時商業債行として除_二掛賣_一掛買_一が普及していたことは良く知られている處であり、例えば蘇軾の東坡奏議_{卷一}論積缺六事并乞檢會應詔四事一處行下狀の一節に、

商賈販賣例無見錢。若用現錢則無利息。須今年索去年所賣。明年索今年所賒。然後計算得行。彼此通濟。

と概述しているが、商人と農民との賣買も矢張り賒賣が行われていた。晁說之の嵩山文集_{卷一}元符三年（一一〇〇）應詔封事に青苗法の三弊を論じているが、その一つ「商旅不可行」に

商旅與農貿易。不勞質劑。皆指秋成以爲期。今秋成之時。一人_{（賣）}在門。一人_{（農）}在野。征常平錢不足。何暇商旅之恤乎。云々。

とあり、商人・農夫間の取引きが大率收穫期に決済する賒賣であったことを述べている。農民が商人から買求めた物資にどんなものがあつたか。勿論種々あつたろうが、今記録の上に散見するものを示すと、先ず唐代のもので、昌黎集_{卷四}論變鹽法事宜狀・張平叔所奏鹽法事件に

臣_{（令）}通計。所在百姓貧多富少。除城郭外。有見錢糴鹽者。十無二三。多用雜物及米穀博易。鹽商利歸於己。無物不取。

或從除貸升斗。約以時熟填還。用此取濟。兩得利便。

とあり、鹽商の農民相手の販賣が收穫期に雜物・米穀で支拂いを受ける掛賣りであつたことを伝え、次に南宋のもので、

樓鑰(隆興元年進士)の攻媿集卷一知復州張公墓誌銘には

慶元四年(一一九八)赴郡(復州)。古號竟陵。廢置靡定。旁枕襄沔。地卑水匯、間三四歲僅一熟。富商歲首以饒茗貧民。

秋取民米。大編捆載而去。公至首訪民瘼。嘆曰。種未入土民已無所告糶。云々。

とあり、富商が歳の初めに茶鹽を農民に除賣しておいて、出來秋に大量の穀物を持ち去るので、住民が食糧に苦しんでいたことを傳えている。特に除賣とは記していないが、次のような場合も勿論除賣が行なわれたものと見ることが出来るよう。

即ち程致道の北山小集卷七乞免秀州和買絹奏狀の一節に引かれる皇祐五年(一〇五三)許下戸折納稅絹指揮節文に

兩浙轉運司奏。體訪得。蘇秀兩州鄉村。自前例種水田。不栽桑柘。每年人戶輸納夏稅物帛。爲無所產。多被行販之人。

預於起納日前。先往出產處。杭・湖州鄉莊賤價擲擲。百姓合納稅物擲價貨賣。

とあり、水田地帶の蘇州・秀州の農民は、養蠶地の杭・湖州より商人が持つて來る絹帛を買つて夏稅の納入を濟ませていたと云うが、この夏稅絹の代價も一般には秋の收穫米が當てられていたことであろう。この場合商人は杭・湖州の養蠶地には米穀を商販し、米・絹双方にわたつて前買いすることも出來た筈である。これは納稅に關係した動きであるが、日常消費に必要な絹帛も矢張り同様な方法で入手されていたろう。そしてこうした關係、生産の地域差に便乘した商人の活動は各地にみられたことと思われる。「太平民產富。桑柘半郊原」(祠部集四)とか「河朔山東。養蠶之利。踰於稼穡」(雞肋編上)とか云われ、また「緩絹州」とも稱される(雞肋集六二張洞傳)河北地方内部にも處々にこうした關係が出來ていたろうし、また絹帛に止まらず他の物資に就いてもみられたことであろう。

除賣の具體例は以上ほんの數例しか示し得ないが、而し以上の中でも、例えば鹽は、陝西路の軍糧の大部分が芻粟を納めた商人に解鹽鈔を支給して代價に充てると云う方法で調達されている關係からして、鹽と穀物との密接な結び付きの生

じ得る條件があるし、また絹も蘇轍の蘇黃門龍川略志^{第八}議罷陝西鑄錢欲以內藏絲紬等折充漕司の一節に、

議者言。陝西舊不鑄錢。而內藏庫歲以紬絲賜陝西漕。西邊苦寒。得之易售。

とあって、陝西地方で絹・絲が賣れ易かったことを述べ、また續資治通鑑長編^{卷五}元符二年（一〇九九）閏九月甲戌條に引く邵伯溫の「題賈炎家傳後」には、長安近傍の州郡に川絹（一疋二千文）河北山東絹（一疋二千三百文）が出廻っていたことを記しているが、宋會要・職官五五・進納官・大觀四年（一一一〇）二月廿七日條に依ると、

凡富商巨賈。乘時射利。以輕貨轉易三路^{（河北・河東・陝西）}。其入已厚。復伺其粒米狼戾。則低價以深藏廣積。惟俟便糴之急。

則高價以中官。

とあり、輕貨を販易する商人が、穀價の低落期を狙って買い占めを行なっていたことを述べている。「利己れに歸すれば物として取らざるは無し」^{（先掲昌黎集）}と云うが、特に軍糧の需要の多い沿邊であれば尚更のこと、穀物と其他茶鹽・雜貨との除賣關係が出来上つていたことであろう。こうした貸付掛賣りの形を執った穀物の前買いが商人の買占めを支え、爭糴の禁止の効果を薄くしていた條件であつたことは疑いない處であろう。

尚こうして商人・農夫の間に除賣關係が普及していった時見逃せない事は、これが貨幣計算に依つて精算されていることである。先ず宋史^{卷三}三陳舜俞傳に依ると、

青苗法行。^{（中略）}上疏自劾曰。民間出舉財物取息重止一倍。約償糴錢而穀粟・布縷・魚鹽・薪藪・糧鉏・釜鋤之屬得雜取之。

とあり、民間の貸付が錢額計算に依つて行なわれていたことを傳えている。收穫後穀物が商人の買い叩きを受けて甚しい低落を示していたことは既に述べたが、こうした中で時價計算に依つて貸借の決済が行なわれれば農民が非常な不利を蒙ることは火を見るより明らかであろう。宋會要の次の記事はこれを窺うのに恰好のものである。即ち食貨五八・賑貸・乾道三年（一一六七）八月廿五日條に

臨安府諸縣及浙西州軍。舊來冬春之間民戶闕食。(中略)富有之家放米人。立約每米一斗爲錢五百。細民但救目前。不惜倍稱之息。及至秋成。一斗不過百二三十。則率用米四斗。出糶得錢五百。以償去年斗米之債。とあり、春先きに借りた一斗の米は、時價に換算すれば、秋には四斗をもつて返さねばならなかったと傳えている。⁶⁴⁾ 除買には更に利息が加わるし(先掲東坡奏議參照)、また李元弼の作邑自箴(卷八)「牙人付身牌約束に「不得高擡價例除賣物貨」とあり、同卷七勝客店戸に「說諭客旅。不得信憑牙人說。作高擡價錢除賣物色」とあるように、時價よりも割高で取引される習慣があつたようであるから、農民の不利は一層大きくなつていた筈である。

三 青 苗 法

こうして北宋政府の軍糧買付は、政府が適正な價格でこれを行なおうとしても、政府側に財源の制約があるうえ、官價決定に際してギルド商人の不正謀略が行われ、政府の需要を見越した商人の買占め、それも前貸に依る買占めがあつて、政府は常に物價の吊上げに悩まされ、爭糶の禁止や配糶などでは殆んどこの弊害を除くことが出來ず、従つて、政府が之等商人の活動に統制を加え、政府財物の浪費を防ぎ和糶運営を安定させようとすれば更に一步進んだ有効な措置を講ずることが要請されていたわけであるが、この和糶問題の解決策としての意義を大きく擔つて登場したものが他ならぬ青苗法であつたと考えられる。以下にこれを検討しよう。

先ず范文正公集・范文正公年譜補遺によると、明道二年(一〇三三)九月條に江淮安撫使の職に在つた范仲淹の事蹟を記して

又體問得。諸軍州自來和糶。當農民出糶。被行人抑壓價例。收糶不前。直候冬深斛斗已入商賈之家。方始添價出糶。是以大段虛費官錢。又不濟得農民。奏乞許農民作保。申乞先請價錢。限一月內入納。免被經販人隔截農民。不得抑勒令請領。

とあり、商人の買占めに對抗して、穀物が賣り出される一月前に農民へ穀價の前拂いをしたとあるのが注意される。前拂いを始めた理由は前半に説明されているが、この意味は最初に和糶の弊害を論述した三司使公事范雍の奏議を検討して得た結果を参照すれば自ら明瞭である。即ち最初農民が穀物を賣り出す時は行人に價例を抑壓されているので政府の買付價格が、商人が故意に安く見積つた市價に依つて低く決められているので仲々買付が進まず、その間に商人に買占められて仕舞い、結局政府は冬に入つて商人の高い米を買わされ、農民は損をし、唯商人だけが利を貪っている。穀物賣り出しの前に官と農民とが直接に取引きを濟まし、それに依つて商人を排除する経販人が官と農民とを隔截するのを免れるようにしたと云うのである。實際こうすれば、商人が政府と「増價争糶」する餘地も狭ばまるし、又農民も預め適當な代價を得ておれば、負債を精算する時不當に穀價を抑えられて損をする心配もなくなり、確かにこれは争糶の禁や配糶などよりも一段と合理的な買付方法であつた筈である。先ず商人の買占めに對抗する關係から政府の買付が前買いに進んでいることが注意されよう。そしてこれはまた、王安石の青苗法と殆んど同型を示している。保人を立てて預め見錢を受け取り收穫後穀物を納めるのは同様、唯異なるのは見錢受取の時期が收穫の一月前と云う點である。青苗法では初め夏料は正月秋料は五月に受領されているが、この相違は、利貸・商品の掛賣りに依る商人の前買・買占めを徹底して封じするため、代價支拂の時期が早められたものと考えることが出来る。正月・五月と云う時期も、夏作・秋作それぞれの出来具合を判定出来る最も早い時期と云う條件で選定されたもののように思われる。

次ぎは著名な陝西路の青苗法である。宋史

卷三三〇 李參傳（長編卷四七）

皇祐五年・一〇五三・四月庚午條）に依ると、

部多成兵多、苦食少。（李）參審訂其闕

（長編作視）（民闕之時）

令民自隱度麥粟之贏。

先貸以錢。俟穀熟還之官。號青苗法。經數

年。廩有羨糧。熙寧青苗法蓋萌於此矣。

朝廷患邊費

（長編作入）（中法歲費）

益廣。參建議輦錢邊郡以平估糶。權罷入中法。比其去。

省權貨錢千（長編作）萬計。

とあり、陝西路で軍糧の不足を解決する爲め穀物の前買いをして成功したことが記されている。前買いの狙いが平估

準價格で買付けることに在り、またその故に財源を有効に使い得て買付額を増やし、軍糧不足を解決出来たものであることは文面より明らかである。⁽⁴⁾穀價の支拂時期に就いては、長編に「民闕乏時」とあり、また別本に「春」と傳えているが、この時期が同時に作物の豐熟度を判定出来た時期でもあることは、右の記事に「令民自隱度麥粟之贏」とある處から知られよう。⁽⁵⁾尚この青苗法は天聖五年（一〇二七）十月辛未に繋けて（長編卷一〇五）「罷陝西預放青苗價錢」とある處から既に早より行なわれていたことが知られるし、又この李參以後絶えたものでないことも、熙寧二年（一〇六九）十一月十日邇英閣で、司馬光が「臣家陝西。有自鄉里來者。皆言。去歲轉運司擅散青苗錢與民。今夏麥不莠熟。而督責嚴急」と述べている處からして明らかである（宋會要（食貨四））。適宜實行されていたことであらう。

第三に擧げられるのは王安石の青苗法の施行直前に行なわれた京東路の例である。宋史^{卷三}王廣淵傳に

改京東轉運使。^(中略)廣淵以方春農事興而民苦乏。兼并之家得以乘急要利。乞留本道錢帛五十萬貸之貧民。歲可獲息二十五萬。從之。其事與青苗錢合。安石始以爲可用。召至京師。云々。

とあり。春先き農事の興る時貧民に貸付を行なったことを傳えているが、これは宋會要・食貨四青苗・熙寧二年九月四日條によると、「先是蘇轍自大名府推官上書。召對。除條例司檢詳文字。云々」として附記された一節に、

安石自此逾月不言青苗。會河北轉運司勾當公事王廣廉召議事。廣廉嘗奏乞度僧牒數千道爲本錢。行陝西漕司私行青苗法。春散秋斂。便民無抑配。與安石意合。即請而施之河北。而青苗法遂行於四方。云々。

とあり、これが青苗法施行以前のものであることが知られる。この王廣淵（廉）の法は、恐らくは宋會要・食貨三八和市・熙寧三年正月廿三日條に、

御史程顥言。聞。京東轉運司。去歲因和買紬絹。多拖數目於人戶上配散。^(中略)又配上等戶俵粟豆錢。詔具析以聞。京東轉運司具析到。所散粟豆錢只是要濟民乏。兼只召人戶情願。卽不是等第一例配俵。詔。已行常平倉新法。今後不得支俵粟豆錢。云々。

とあり彈効を受けている粟豆錢であろうが、これが穀物の前買いであったことは粟豆錢と云う名稱やこれが和買絹と同時に論ぜられている處から容易に推察される。併せてまた上等戸に配俵されたと云われる點も注意さるべきであろう。

以上、熙寧の青苗法に先行する前例三つを擧げて検討したが、この三者何れも財政上穀物の需要の多い地域で、而も穀物の前買いとして現われている點が注意されよう。そして、こう考えて來て熙寧の青苗法に就いてみると、宋會要・食貨四青苗・熙寧二年九月四日條に、

詔。常平廣惠倉等見錢。依陝西出俵青苗錢例。取當年以前十年內逐色斛斗一年豐熟時最低實直價例。立定預支（每斗價例）。召人戶情願請領。

とあり、是れより以前十年の間の穀物の最低價格を取って預支每斗價例を定めると云うなど、明らかに平準價格に依る穀物前買いと云う線が色濃く打ち出されているのを認めることが出来るし、また宋史卷三七范鎮傳に依れば、范鎮と呂惠卿との青苗法論争を傳えていて、

呂惠卿在邇英言。今預買絹亦青苗之比。鎮曰。預買亦敝法也。若府庫有餘。當并去之。豈應援以爲比。

とあり、青苗法の立案者とされる呂惠卿自身が、この法を預買絹に對比していたことが知られる。青苗法はまた預買穀とも稱さるべきものであらう。また「府庫に餘り有れば、當さに并せて之れを去むべし」と云う范鎮の意見も留意すべき點である。

結 論

要するに、王安石の青苗法が北宋の和糴政策の發展の上でとらえらるべきものであることは明らかであらう。政府の軍糧買付けが常に商人の買占めと價格吊上げに搖ぶられ不本意な財物の浪費を重ね、その結果國家財政それも國の命脈に係る邊防財政運営の安定性・計畫性が失われるのであれば、これら商人の活動は國家の命運を賭してでも統制を加えなけ

ればならぬ。商人の買占めが争糶の禁・配糶などでは對抗出来ない前貸資本に據つて支えられているのであれば、政府の買付けも亦勢い前買いにまで進まなければならぬ。こうして生れたのが青苗法であろう。穀物の前買いであるからこそ、鄉村の上三等戸に重點を置いていたのである。既に早い時期から地方的に行なわれていた前買いが特に熙寧の年に取り上げられて全國的な施行をみたのは、矢張り當時の財政窮乏が最早和糶の浪費を許せぬほどに極まっていたことによるのであろう。和糶が初めから敵視していたのは富商巨賈の謀略であつた。青苗法の狙いも商人の謀略を抑えるに在った。だからこそ資本を擁して市場に君臨する都市の商人に對置して、全鄉村戸に貸付けを行なつたのであろう。趙鼎臣の竹隱畸士集^{卷一}一定州州學私試策問に

富商巨賈因官爲市。緩則深藏而不售。急則倍價以取贏。宿貨蓄資。乘機奔走。馬牛之負四出近郊。以是年豐而穀愈貴。粟侈而農益耗。糴錢使糜於縣官。而惠利不歸於南畝。

とあり、財政の運営に便乗して活動する商人への對策を問うているが、青苗法はこれに應えるものであつたと思われる。冒頭に述べた韓琦と三司條例司との「兼并之家」論争、上三等戸も亦時に窮乏して兼并之家の放債に苦しめられていると云う兼并之家は、右に述べられているような都市の豪商大賈を指しているものであろう。

青苗本錢に餘剩のある際、青苗錢の支俵が坊郭戸にまで及んでいるのは、王安石の言葉によれば、

坊郭所以俵錢者。以常平本多。農田所須已足而有餘。則因以振市人乏絕。又以廣常常平儲蓄也。廣常常平儲蓄。所以俵百姓之凶荒。

とあり、常平倉の蓄積を大きくするのが目的であると述べている。國の爲めに穀物を集めて納入する者であれば坊郭戸と雖も歡迎さるべきものであつたろう。

青苗法は富商の穀物市場支配を抑え、適正な價格で國家が必要とするだけの穀物を買入れられるようにし、邊防財政に安定性と計畫性を持たせようとするものであり、その意味で、王安石の唱える「理財之策」の一翼を擔うに相應しいもので

あったと考えられる。勿論青苗法も常平、新法と呼ばれる以上、就賤貴糶・就貴賤糶に依る穀價の常平を運営の根幹としたものである。しかしこの常平法は單に穀價の平準を保つと云うことを越えて、常平の爲めの買付そのものが既に財政需要充足の役割を大きく果していたようである。永樂大典^{卷七五} 倉・常平倉二には中書備對を引いて青苗法の熙寧九年度會計・十年度豫算を傳えているが、これによると、熙寧九年度末の河北東西路の常平倉見在額は、斛斗は四〇九六〇一七石、草は三〇八一一二束となっている。嘉祐元年（一〇五六）當時の並邊十一州軍の歲計粟百八十萬石・豆六十五萬石・芻三百七十萬圍の數字や皇祐四年（一〇五二）當時の「毎年河北便糶糧斛三四百萬斛」を上廻る額である。郵延路に就いて見ても三八四〇九五石の見在額は元豐二年（一〇七九）當時の「歲計軍食二十七萬餘石」を遙かに超えている。「常平新法は本より邊糶を權して緩急を待つ所以也」と云った王安石の言葉や一般編民賑濟のために常平倉所管錢數の半額を保留しておく存留一半の制度が漸く熙寧七年に至って設けられていることや、また神宗沒後青苗法の改制が論議された中で長編^{卷三} 元祐元年（一〇八六）十一月辛巳條に

臣僚上言。朝廷罷依青苗錢。令諸路提刑司。委豐熟州縣廣行收糶。意欲常有儲蓄。而戶部乃請。令轉運司更不收糶年計。止將常平斛斗兌糶。失朝廷養民之恩。云々。

とあるような、轉運司の糶買を罷め軍糧の買付一切を常平倉に委ねようと云う意見が戸部から提案されていることなど併せて注意される事柄である。常平新法によって融通救済を受けたのは、一般編民ではなく財政官廳ではなかったろうか。そして青苗法に依る糶買が轉運司ではなく常平司に委管されたのは、糶買を別會計にすることに依って、買付資金の流用や資金調達の遅延を免れようとしたものではなからうか。

註

- (1) 本稿の作成に参照した研究は、佐伯教授「王安石」（富山房刊）及び今堀教授「宋代常平倉研究」（史學雜誌五六編一〇・一一）

- (2) 以下に挙げた資料で特にことわりのないものは韓魏公集卷一七家傳に據るものである。

- (3) 長編卷二五五熙寧七年八月癸未條に依ると、呂惠卿の「常平錢穀。並於民闕乏時月。作一料給散。陸田多處以二月。水田多處以三月爲限。隨秋稅起催。限年終納足」という意見に従って一料給散に改められている。正月・五月の夏秋二料給散にはいろいろ批判があつたようである。例えば知青州歐陽脩は「若夏科錢。於春中俵散。猶是青黃不相接之時。雖不戸戸闕乏。然其間容有不濟者。以爲惠政尙有可說。若秋科錢。於五月俵散。蠶麥成熟人戸不乏之時。何名濟闕。直是放債取利爾」と述べている（長編卷二一一熙寧三年五月庚戌條）。この批判は唐宋の詩人聶夷中が「二月賣新絲。五月糶秋穀」と歌つて、二月・五月に既に絹・穀を前賣りしている農民を哀れんでいるのを見れば必ずしも當を得たものとは思われないが、或はこうした批判も考慮して改められたのかも知れない。
- (4) 今堀教授前掲論文一〇號五二頁に指摘された處である。尙宋會要食貨六八賑貸の項參照。
- (5) 例えば長編卷六一景德二年九月甲寅條・同卷八六大中祥符九年四月辛丑條・同卷八八同九年九月甲辰條など參照。
- (6) この客戸は佃戸ではあるまい。拙稿「宋代の戸口統計上の所謂客戸について」（史淵七九輯）の見解に従っている。
- (7) 長編卷二一四熙寧三年八月癸酉條參照。
- (8) この他長編卷一八四嘉祐元年（一〇五六）十月丁卯條に「薛向建議。並邊十一州軍歲計。粟百八十萬石。爲錢百六十萬緡。豆六十五萬石。芻三百七十萬圍。並邊租賦歲可得粟豆芻五十萬。其餘皆商人入中」と見えている。
- (9) 溫國文正司馬公文集卷五四乞遯時收糶常平斛料筭子（長編卷三
- (10) 四八元祐元年八月丁亥條）に「又有官吏不能察知在市斛料實價。只信憑行人。與蓄積之家通同作弊。當收成之初農夫要錢急糶之時。故意小估價例。令官中收糶不得。盡入蓄積之家。直至過時。蓄積之家倉廩盈滿。方始頓添價例。中糶入官。是以農夫糶穀止得賤價。官中糶穀常用貴價。厚利皆歸蓄積之家」とある。この點は例えば「富商大賈藏錫者或有之。彼農夫之富者。不過占田稍廣・積穀稍多・室屋修完・耕中不假而已」といった如き意見が、長編卷二四七熙寧六年九月壬寅條、同卷二五二同七年四月乙酉條、同卷三六五元祐元年二月乙丑條など屢々現らわれているように、富農には買附資金が缺けていることから察知される處である。
- (11) 長編卷一三八慶曆二年（一〇四二）十一月辛卯條參照。
- (12) 本文に挙げた資料の外には、長編卷一〇一天聖元年閏九月壬子條、同卷一七四皇祐五年六月壬辰條參照。
- (13) 同様の記述は蘇轍樂城集卷三五制置三司條例司論事狀にもみえる。除に就いては加藤博士「宋代の商慣習除に就いて」（支那經濟史考證下卷）參照。
- (14) 青苗法も錢額計算によっているため、これと同様の現象が起きていたようである。溫國文正司馬公文集卷四四奏爲乞不將米折青苗錢狀にはこれを詳論して、「今以一斗陳米散與飢民。却令納小麥一斗八升七合五勺。或納粟三斗。所取利約近一倍。向去物價轉貴。則取利轉多」という狀態であるので、現物計算に改め、二分の利息を併せて、一斗の支俵には一斗二升の穀物を納めさせるようにと提案している。
- (15) 長編卷四〇〇元祐二年五月乙卯條に引かれる呂惠卿が河東路の

(16)

和糴を論じた奏議の一節に「雖估價頗賤。而民於登稔之際先期得錢。未以爲病」とあるのも、前拂いの利點を指摘したものとは解されないだろうか。

政府の軍糧買附けの中、特に枉費の甚だしかったのは沿邊の入中法である。この事を指摘した記事は頗る多いが、二、三例を挙げると、長編卷一一八景祐三年（一〇三五）三月條に

且以天聖九年至景祐二年較之。五年之間。河北緣邊十六州軍入中。虛費絹錢五百六十八萬。

とあり、同卷一七〇皇祐四年（一〇五二）二月己亥に

（河北）芻粟之入。大約虛估居十之八。米斗七百。莠者千錢とあり、同卷一八一至和二年（一〇五五）十一月己未に、

薛向言河北糴法之弊。以爲。被邊十四州悉仰食度支。歲費錢五百萬緡。得米粟百六十萬斛。其實才直二百萬緡爾。而歲常虛費三百萬緡入於商賈・蕃販之家。

とある。こうした弊害を惹き起すのは、一つには、歐陽文忠公文集卷一七一河北奉仕奏草上乞展便糴斛科限の一節に、

今年方遇豐熟。正是好行入便之時。價例比去年大段低減。兼每年客人雖有斛斗不肯便行入中。須待體探年歲豐儉。及伺候官中價例高低。常至三四月間。方始猛來入中。

とあるような商賈の謀略があつたからであらう。そこでこの弊害を避け若しくは緩和するには、宋會要食貨三九市糴糧草・天聖五年（一〇二七）十月條の

三司言。陝西十一州軍本處官員使臣等。將收糴・博糴・便糴・納到糧草銓合爲數。乞行酬賞。省司勘會。其收糴・博糴・糧草・數少。便糴數多。詳酌。蓋是監糴官員・使臣不切用心。趁時收

博。致過時却就貴價入便。

長編卷一八八嘉祐三年（一〇五八）九月辛未條の始用薛向議。罷並邊入中粟。自京畿錢帛至河北。專以見錢和糴。云々

という記事から窺えるように、穀物の出廻り期に逃さず現地農民の穀物を買ひ込むことが必要であつた。そして事實この方法は効果があつたと思われる。というのは、入中法をとっている場合でも、例えば長編卷六〇景德二年（一〇〇五）五月壬子條に、

其輸邊粟者非盡行商。率其土人。既得交引。特詣衙要州府糴之。市得者寡至京師。

とあり、同卷一〇〇天聖元年（一〇二三）正月條に

而入中者非盡行商。多其土人。既不知茶利厚薄。且急於售錢。得券則轉鬻於茶商。

とあるように入納される穀物は多くは現地のものであるし、また宋史卷三四〇呂大忠傳に

時郡（秦州）糴民粟。豪家因之制操縱之柄。大忠選僚衆。自旦入倉。雖升斗亦受。不使有所壅闕。民喜爭運粟于倉。負錢而去。得百餘萬斛。（係元祐年間之事）

とあるように、農民の零細な穀物を買ひ集めて成功している實例もみえてゐるからである。しかしこうした買附けが行なわれるためには右の諸資料に明白なように、政府側に豊富な現錢が必要であり、終始錢不足に悩む宋朝には實施困難なことであつた。青苗法が行なわれると、豊富な糴本が特別會計で常平倉に委管され、客戶から一等戸までの農民の穀物を買ひ込まれるよ

うになったのであるから、青苗法はこうした點でも意義があったと思われる。

(17) 蘇黃門龍川略志第三與王介甫論青苗塩法鑄錢利害、參照。

(18) 韓魏公集卷一七家傳熙寧三年の上疏にも「此乃轉運司。因軍儲有關。遇自冬涉春雨雪及時。麥苗滋盛。決見成熟。行於一時。則可也」と述べている。

(19) この記事は註17にもあり稍詳しい。河北轉運司勾當公事王廣廉と京東轉運使王廣淵とは同一人物であろう。尙又長編卷一一一熙寧三年五月丁巳の京東漕司王廣淵が河東路へ改められた事を傳えた條には「廣淵爲京東漕。在二年十二月八日」と註記しているが、これと宋史・會要・龍川略志との異同の解明は後考にまきたい。

(20) これと同様の記事は宋會要食貨三七市易及び同六四匹帛雜錄にも出ている。

(21) 韓魏公集卷一七家傳・熙寧三年の上疏による補正。

(22) 永樂大典卷七五〇七倉・常平倉所引の曾鞏元豐類藁・奏論常平三等糴糶斛不便狀によると、

當州檢會。昨准本路提刑司牒。准司農寺牒。准熙寧元年六月九日中書劄子節文。委逐路提刑司。下州軍監縣。各令拱析十五年以來斛斛價。分爲平及貴賤三等。開坐聞奏。とあり、全國的に穀價の調査を命じている。青苗法實施の準備であらうか。

註17參照。

(23) 預買絹に關する資料は諸處に見えているが、今長編卷四四咸平二年五月丁酉條に引く實錄・大中祥符三年閏二月己未の記事を

みると、

河北轉運使李士衡言。本路歲給諸軍帛七十萬。民間罕有緡錢。常預假于豪民出倍稱之息。及期則輸賦之外先償逋負。以是工機之利愈薄。請令官司預給帛錢。俾及時輸送。則民獲利而官亦足用。從之。

(24) ところ。豪家の利貸に機戸が苦しめられていたことが帛錢預給の條件になつてはいるが、預給に乗り出した目的は、軍帛七千萬疋の調達である。青苗法との酷似が認められよう。

(25) 宋會要食貨青苗・熙寧二月一日條。

童貫の均糶では坊郭戸にも穀物の買附が賦課されている。宋會要・食貨七〇均糶雜錄・政和二年（一一二二）七月二十八日の詔勅に

（上略）坊郭第六等以下・鄉村第五等以下以免均。（中略）今來均糶。並依青苗法。先期支錢。候至合送納時月。若遇豐凶貴賤不同。以有餘不足通計。云々

とある。坊郭戸の青苗錢も矢張り請錢納穀の原則は守られていたろう。穀物の蓄積を大きくすることが青苗法の狙いであるから。

(26) 註8長編記事參照。

(27) 長編卷一七二皇祐四年三月丁未條包拯奏參照。

(28) 長編卷三〇〇元豐二年九月己丑條に「詔以永興路常平倉穀十九萬石給鄜延路九將守禦之用。餘令轉運司以漸計置。以鄜延路言。歲計軍食二十七萬餘石。而常平無餘故也」とある。

(29) 長編卷二五六熙寧七年九月壬子條及び辛酉條參照。

On the Origin of the *Ch'ing-miao-fa* 青苗法

Yasushi Kusano

Since the merchants practiced the cornering of cereals, boosted the prices and sold at high prices to the government, the northern Sung dynasty faced a difficult financial problem to supply its army with provisions. Consequently, the government attempted to control the merchants first by means of prohibiting commercial transactions during the period of government purchasing and buying from the farmers. This policy proved a failure because of the merchants' advance purchase in the form of loans to the producers. The *ch'ing-miao-fa* system, which was no less than government advance buying, was brought into practice to cure this difficulty.

A Sidelight on Islamic Financiers, especially the *Jahbadh*

Syôkô Okazaki

The author tries to make clear the nature of the *jahbadh* system, which has been little explored because of its complicated character. The term *jahbadh* is a derivative from the Persian *kihbad*, and seems to have appeared about the tenth century. The *jahbadh* was a kind of licensed financial agent whose business was to collect taxes, remit government funds, loan to the caliphate, etc. and in return he was granted some privileges. This system came into existence as a result of confused local currency and different purities of precious metals, developing into a politico-financial organization with the progress of the deterioration of the financial system.

The *Nien-tzu* 捻子 and the *Nien* Rebellion 捻軍

Sinji Ono

The *Nien-tzu* organization, which was the core of the *Nien-tzu* Rebellion (1853-68), was not a simple secret society affiliated with the